

全米女子スポーツをリードする テキサス大学(中)小笠原悦子

6つのゴールを達成するためにIAWが成し遂げている仕事に対して彼女自身は「私たちの成功の公式は簡単よ」といながら、すなわち「我々は国内で最高のコーチを雇い、最も良い選手を勧誘するためにNCARLに基ついた最大限の奨学金を提供し、たくさんの試合を経験させ、授業や活動の場では選手たちに最大のパフォーマンスで挑戦させること」であると述べている。

IAWはこの端的な彼女の言葉でもわかるように、これらのゴールに到達するために、それぞれに目標が掲げられ、その達成のためにいくつかの部門に分かれ、それぞれのスペシャリストたちがとにかくうまく機能している。

IAWは7つの部門からなる組織であるが、全ての部門が興味深いものである。その中でも最も注目し値すると思われるのがこの大学の特徴でもあるアカデミックな部門 (Academics/Eligibility) と Student Health Service 部門にある Performance Team である。

鹿屋体育大学は国立で初めての体育大学として設立されたが、推薦入試と

一般入試(大学入試センター試験)で学生を迎える。しばしば話題になるのは学生自身の学業とクラブ活動の両立の問題である。この問題はわれわれの大学だけの問題ではないと思われるが、トップアスリートの養成と彼らの学業との両立(言いかえれば、優秀な学業成績をもったトップアスリートの養成)にはどの大学でも苦心されていることと思う。事実、アメリカでもNCARLのルールは、このバランスを保つために

ほとんど厳しくなり、成績の優秀でない学生のトレーニング時間の制限に加え、すべての学生選手(Student-Athletes)にまでトレーニング時間に規制がなされようとしている。これは学生としての本分をわきまえた上での競技選手であるという大前提を重視したNCARLの会議での決定であるという。この厳しくなりつつあるルールの中で大学のトップアスリートの養成を行なうにはそれなりの覚悟が必要である。そこで、再びDr. Lapinoの言葉が浮かんでくる。「私たちのゴールは100%の卒業率である。したがって、我々のモットーは、Study Now So You Can Play Later in Life。」

IAWが誇るこのモットーに裏付けられた高い卒業率という結果は、先ほど述べたアカデミック部門による功績である。

そこで次にこの部門の責任者 (Assistant Director for Academics/Eligibility) Page Dr. Sheila Rice の話によると、「一番大切なことは、Freshmanである1年次にどれだけ大学生活(特に時間の使い方: Time-Management)をうまくやって行けるかを教育することだ」という。この言葉はシンプルなものであるが大変重要なことであり、誰もがわかっていながら実際には学生の自主性なるものに任せる傾向が日本では強いのではないだろうか。ほとんどのテキサス大学の学生選手自身が述べているように高校時代までほとんど勉強をしなかったのに勉強の仕方を知らなかったという。しかし、ここテキサス大学では入学するとすぐにDr. Riceとの面接の結果、彼らに適した特別なAcademic Coach (チームの役割でいえばアシスタントコーチに相当するこの部門では大切な役割)が付き、週に4回午後の練習が終了した2時間(7:00-9:00)の

表I 競泳選手の日課の一例

AM 5:30	起床
6:00-8:00	朝練習
8:30-11:30	授業
PM 12:30-1:00	昼食
1:00-2:00	授業
2:00-3:00	ウェイトトレーニング
3:00-5:00	午後練習
5:30-6:30	夕食
7:00-9:00	勉強 (Study Hall)
9:00-10:30	宿題その他
10:30	就寝

Basic Study Skills Program (BSSP) という特殊な個人教育が行なわれる。これは最初の1学期が必修であり、2学期以降はこのプログラムの必要のないと思われる学生は家庭教師 (Tutor) による教育だけになる。しかし、Academic Coachの許可が得られない(ある成績を獲得していない)とBSSPプログラムは卒業するまで続けられる。参考までに彼らの代表的な1日の日課を表Iに示した。本当にハードな毎日を通しながら、しかもトップの競技成績(例えば、競泳に関して今年もチームの80%以上の15名がアメリカナショナルチームのメンバーに選ばれている)を収める彼らに本当に感心するばかりである。(「体育の科学」一九九二年十一月号より「次号に続く」)